

## 世界を生き生きとらせる一弁証法（前半）

2010.11.24

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」 <http://benkaku.typepad.jp/blog/>

はじめに



### 一。前回のおさらい

#### 1. 世界観とは

自然、社会、人間についての、まとまった「ものの見方・考え方」

\*つまり「ものさし」

\*「ものさし」がゆがんでいけば、行動・実践もゆがんでくる。

科学的な世界観を

\*科学的とは、「正しい」とか「正しくない」とかいうことではない

\*ものごとの「ありのままの事実」から出発すること。そして、そのなかにある法則性をみつけてゆくこと。その法則にそって、現実に関わること。

#### 2. ものごとを、ありのままに見る（唯物論）

事実から出発する

\*先入観、思い込み、独断におちいらす。

\*自分は、対象のありのままの姿を認識しているだろうか？ - つねに問う姿勢

哲学としての言葉でいうと、唯物論的態度、という。

### 二。世界を生き生きととらせるために（弁証法）

世界（自然・人間・社会）をありのままに見れば、じつに豊かな「ありよう」をしていることが見えてくる。

#### 1. ものごとは、動いている・変化している

静止・固定は相対的、運動は絶対的

\*運動とは、物質の存在形態

\*あるものが存在しているということは、そのものがそのものでありながら、同時にそのものでなくなっている過程である、ということ。

\*ひとりの人間も、その人でありながら、同時にその人でなくなっていく。つまり、つねに運動・変化している。

子どもの変化・成長は、日々実感できる

\* ドラマがいっぱい



\* でも、大人はどうか。「どうせあの人は」「どうせ自分は」

\* 社会はどうか。「世の中、しょせん変わらないよ」

### **首尾一貫して、「ものごとはつねに変化している」と見ることができるか。**

「これまでになかったような新しい、いっそう高度な質のものにむかっての上昇的・前進的な変化のことを発展といいますが、…「どうせ」という見かたには、現実のなかで発展しつつあるものへの感覚が欠けているのです。

(中略) 私たちが生き生きしてくるときというのは、自分をふくめた現実のなかに成長・発展しつつあるものを見だし、育て、そこに現実の生きた姿をとらえるとき、ということができます」

(『新・働くものの学習基礎講座1 哲学』労働者教育協会編、学習の友社)

そして、つぎの問題。

### **運動・変化・発展。それはどのような姿をとってすすむのか。**

#### 2. 変化の法則性 矛盾が発展の原動力

動いている(生きてい)ということは、矛盾がある、ということ

\* ここでいう「矛盾」とは、一般的に使う「つじつまがあわない」という意味の矛盾ではない。

\* ひとつのものごとが、たがいに対立し、否定しあい、排除しあう2つの要素、部分、側面からなりたっているという関係をさす。

ものごとの中には、一般的に、その内部に相反する要素や傾向がある

\* 子どもの自我の芽生え

\* 自分の中にある「相対立する自分」

\* 社会の矛盾

### **事物の生きたドラマをとらえる = その事物の矛盾をとらえるということ**

ものごとの矛盾のぶつかりあいの結果、新しい質、より上昇的・前進的な変化が生み出された場合、それを「発展」という。

自分の成長を考えた場合 自分のなかに「大きな矛盾」をつくる

\* 「こうありたい自分」と「いまの自分」とのぶつかりあい

\* 2つの方法がある（相互に関連している）

「めあて」になる人をつくる

「自分づくり」の「できるだけ高い目標」と「そのための計画」をつくる

\* 自分を高めるための「無理」をすることは、現状の肯定的否定の「エネルギー」

\* 原動力は、「こんな自分が」の喜びとともに、他者の力になれる「役にたつ自分」

「ストレスこそ、子供を青年にし、青年を大人に成長させる糧であるはずである。ストレスを1つ1つ乗り越えることが、『人間』の発達なのである。ストレスは元来、避けるべき対象ではなく、乗り越えるべき対象なのである。一切のストレスを回避すれば、それは楽であろうが、その人は成長もまたあきらめることになるのである。ストレスは別の方向からみれば『他人からの期待』であり、『他からの評価を落としたくない矜持（きょうじ）』であり『自分の生き方をつらぬきたい意志』であるから、当然、痛み、苦しみを伴うのである」

（中沢正夫『ストレス「善玉」論』岩波現代文庫）

「ゆらぐ」ことのできる力

\* 自分はいまのままでいいのだろうか？

\* あのとときの、あの実践は、ほんとうにあれで良かったのだろうか？

\* 「ゆらぐ」ことは、次のよりよい実践・成長へのステップとなる

\* どんどん失敗することも大事。そこから「ゆらぎ」「矛盾」が生まれる。

\* 絶対に失敗しない方法は、何もしないこと。

### 3. 変化の法則性 - 量的変化と質的变化

質と量はバラバラにきりはなされて存在できない

\* ある質にはかならず一定の範囲の量に対応している。

\* 逆も同じ。



量の変化が積み重なると、質の変化に転化する（発展）

\* ものごとの発展は、一般的に、まずものごと内部の量の変化からはじまる。それはすぐにものごとの質を変えはせず、したがってなかなか表面には目立たない。

ゆっくりと、一定期間、こうした状態での変化が進行していく。

\* そして、それがある段階に達したとき、飛躍的なかたちで質の変化がひきおこされる。一直線でない、ジグザグした変化ということ。

\* したがって、めだたない量の変化をけっして軽視しないことが大事。そのつみかさねが、やがて質の変化をひきおこす。

\* 子どもの変化

\* スポーツや学習なども、訓練を一定量こなさなければ、質的变化はおとずれない。

\* 自分がいる環境の変化、社会の変化も

#### 4. 変化の法則性 - 肯定をふくんだ否定

肯定をふくんだ前進的な否定 - 「か×か」「黒か白か」ではなく

\* 発展とは、古い質が、新しい、よりいっそう高度な質に変化すること。

\* そのさい、古い質は「否定」される。しかしそれは、古い質のなかにあった、積極的な内容、未来につながる要素を肯定し、新しいものに引き継ぐという「否定」となる。ものごとを全面的に否定してしまうと、発展はない。

\* 「ダメ出し」の仕方、人との関係も、全面否定ではなく。

\* 社会の発展も、肯定をふくんだ否定ですすんできた。

“中途半端さ”を「受容する力」

\* いつも、前進的な要素が勝利するわけではない

\* ものごとを断面的にきりとり、その瞬間において黒白をつけることはできるが、変化というのは、うねうねと黒も白もふくみつつ続くものであり、その中途半端さを「受容する力」、「結果を急ぎすぎない力」を身につけることも大事。

「いつもいいこと探し」のエキスパートに

\* 「いいこと」「つぎにつながる要素」は、はっきり目に見えない場合も多い。

\* いいことを探せる力。豊かな理性と、変化を見逃さない感性。

創造的自分づくり - 「捨て去りつつ、つけくわえる」の連続

\* 過去より受けついだもののなかから、否定すべきところは捨て去る

\* 現時点で獲得できる新しい要素を貪欲に吸収して、あらためて全体を再構成してゆく。

#### 5. まとめ

弁証法的な見方は、世界の豊かなあり方・姿をとらえる力をもつ。

